

日付:2014年10月19日／聖書:イザヤ書1:2～20、11:6

主題:「論じ合おうではないか」

「天よ聞け、地よ耳を傾けよ、主が語られる」と始まるこのところは、全世界に呼びかける裁判が成されようとしている。被告人は、ユダの民。南ユダ国の王はじめ、民が訴えられたわけである。原告は神である。神がユダの民を訴えたわけである。そして、「天」や「地」を証人として呼び出しつつ、ユダの罪を、神は告発した。

何故、神はこのような訴えをしたのか。…この時代は、ウジヤ王の時代で、ユダ国にとって最も繁栄した時代、豊かな時代であったが、神殿で行われる礼拝、祭りの捧げものは、豊かさのゆえに羊や牛、作物の実りが、惜しげも無く捧げられて行った。しかし、一歩神殿の外に、エルサレムの中心地から外に出ると、そこには社会的弱者が住む村や町があった。《お前たちが手を広げて祈っても、わたしは目を覆う。どれほど祈りを繰り返しても、決して聞かない。お前たちの血にまみれた手を》(15節)。「血にまみれた手」とは、エルサレムに住む裕福なユダの民の捧げる手、行う手ということだが、それはいかに社会的弱者の犠牲によって成り立っているか、エルサレムの富は、地方農民の苦難と嘆きによるものだということ。このような構図は、いつの時代もあるもの。今の世の富も、弱者の犠牲によって成り立っているものである。

神はそのことをしっかり見ておられ、あなたの富は、あなたの捧げる礼拝は、清いものか、真実のものか、…。神は見ておられ、そして問うお方であるということである。

イザヤの記すこの預言書は、国の罪、民の罪を告発しているということである。私たちがまたこの国のあり方をしっかり見定め、罪を告発する知恵と勇気が求められているということでもあろう。キリストの教会は、そういう意味で「地の塩、世の光」としての働きが求められている。主なる神は、そのことを願っておられるのであり、その働きが成されることを、私たちに期待している。そのために主は、私たちと「論じ合おうではないか、と…言われる」。(神谷)